

素晴らしい須走を知りたい!

## 「素晴らしい隊」養成講座 第1回講座概要

### 第1部：座学 巡拝の道・富士山で富士講を体験する「富士山と富士講」

#### ■日時

令和2年9月26日（土）9時～12時

#### ■場所

須走コミュニティセンター

#### ■講師

○宍野 史生 富士道第十二世 神道扶桑教第六世 管長

#### ■講義概要

##### 1. 富士道 神道扶桑教

－2本の動画を視聴（①教派神道連合会二十周年紹介ビデオ ②扶桑教紹介テレビ放映資料

－2つの映像を見ていただいた。1つは、「扶桑教と富士講の関わり」。なに故、富士講が扶桑教と呼ばれるようになったかという映像。もう1つが今、富士山とどう向き合っているかという映像。今着ているTシャツ、「心」いう字で富士山を描いている。心の富士「心字富士」という先達の伝統技法。心の字で富士山を描く。丸く書く人は「心は丸く」という思いを込める、上の心を平らかに書く人は「心は穏やかに」という願いが込められている。各々の先達の教えや願い、人柄を「心字富士」に表している伝統がある。今日は私が自分で書いたもの、「心」。「富士山登拝」「天地平安」「萬民安福」「六根清浄」「御山晴天」「烏帽子岩天拝宮」と書いてある。「天地平安」「萬民安福」が富士道開祖のご開祖様の心願、本物の願い。「天地平安」は天地が平安であるように。「萬民安福」は多くの皆さんが安心して暮らせるように、というのが富士講の心願である。私どもはこの角行様の心願を今も守りつづけて富士山に祈りをささげている。今の言葉で言うと「天地平安」は世界平和、「萬民安福」は社会福祉の充実という風に考えると、元亀3年から448年たった今も人の願い、祈りの本質は変わっていないのではないかと感じている。

－2本の映像を視聴（①富士登拝 ②おはち巡り）

－2本の画像を見ていただいた。ドローンを使い、遠くからも撮れるようになったので、ぜひご覧いただきたいと思い紹介した。1本目は、毎年私どもがいくつかの講社に分かれて上がるが、一番重要な行為として行っている登拝。白い箱を奉安して上がっているが、この中には1619年(元和5年)に角行様が神様からご神意を頂いて「このような鏡を作りなさい」と言われて角行様が作った御鏡。この御鏡に神様が宿っていただけるということでこしらえた。これがずっと私どもに伝わっている。御神實(みかんざね)と呼んでいるが、御神實を背負い3250mのところにある私どもが管理をさせていただいている天拝宮に一ヶ月間奉安させていただく。そしてそこで大勢の登山者の皆様をお迎えして、あと500m、2時間半位で御頂上へ上がる、そして下山をするための安全を角行様の御神實とともに御祈願をし、見守らせていただいている。皆様に今日お土産として梅干しを差し上げている。「力梅」という。これは八合目の天拝宮で登拝をされ、御祈願をなされた方々にお渡しし、「あと500mだからしっかり頑張れ」と、口に含んでいただいて登っていただいている。通常は八合目で頒布させていただいている。今年のご承知のように、御山が閉じているので八合目で頒布することができない。今日は、せっかくの機会なので、皆様方にぜひ力をつけていただきたいと



特別に持ってきた。先ほどの映像を見ていただいたように、私どもは白い装束で登る。白衣に袴、たっつけの袴、足元が縛って登りやすくしてある。現在は地下足袋を履くが、昔の出で立ちは草鞋でずっと登った。富士吉田口の御師の宿から登って下りるのに1人6~7足必要だったと言われていた。すごく重要なことが一つある。この草鞋、御師の宿から草鞋でずっと歩き、江戸時代は三合目からは必ず傷んでいても傷んでいなくても草鞋は取り換えるのが一つの所作、作法だった。三合目で入山料(講中5人分を御師の宿で払う)、今で言う登山料を払ったかどうかの証明書、今で言う「受け取り」を見せて、そこで必ず草鞋を履き替えたものだといわれ聞かされてきた。三合目の中宮役所というところ。ここからは江戸時代は女性の方は登ってはいけなかった。女人禁制と言われた御山なので、女性の方は三合目から少し脇へ行くと女人頂上というところがある。鳥居が建っていて、鳥居から御山の中だけ御頂上が見えるというところが女人頂上。女性はここから御頂上を拜んで下りた。草鞋を履き替えたかのはどうしてかということ、三合目からはいよいよ本当に神様の御体に踏み入れていくという事なので、神様の御体に汚れた草鞋で入るのは誠にもったいないということで、さらの草鞋に履き替えた。使った草鞋はそのまま一合目の馬返しに下ろされた。そこまでは歩いて行けたし、馬も行けた。体力の弱い方は馬でそこまで行った。たくさん馬がいる所、今で言うバス停みたいところ。そこの馬に小さく切って飼葉にした。きれいな草鞋で御山に登り、神様の御体に抱かれるように行く。面白いと思うのは、結果的にそこで下の菌や種、雑菌、ウイルスを御山には持ち込まない効果があったこと。高山植物が保護されていた。結果的に山の環境を外来種から守った。現在東口にも登り口に足元をきれいにするブースがある。つい最近できたが、靴の底の土をきれいにしてから登る。下の種や菌を御山に持ち込まないことは非常に重要なことだと思う。吉田口は、今年からやる予定だったが今年は御山が閉じたので、その機材を持ち込んでいないようだ。私は数年前から、足元と車のタイヤをどこかで洗う仕組みを作ってほしいと強く文化庁にも働きかけ、やっと吉田口は今年から予算が下りた。巨大な亀の子たわしみたいなもので足元をきれいにする。もう一つの提案は、バスや車が上がるので、一合目当たりの車道の一部にタイヤを洗浄するブースを作ってもらいたいという事も強く願っている。五合目は天地の境と言って、五合目からは天井だと言っていた。私が登り始めたころは六合目は木が生えていなかったが、温暖化と外来種の植物が増えていて、30 cm位の低木が六合目までたくさん生えるようになった。そういう意味では温暖化、もう一つは外来種の種を皆さんが持ち込んでしまうのではないかと心配している。音声で聞いていただいたが、「六根清浄…」と声をかけながら、掛け念丈、掛け丈ともいうが、「懺悔懺悔六根清浄」と言って登る。六根とは、六つの心と体。目・耳・鼻・口・心そして体。人間の六つの感覚。①見える②聞こえる③匂う④味わう⑤心で感じる⑥触れて体が感じる。五感プラス一感を六根。この六根をきれいにして御山に登らせていただく、常にそういう気持ちで登らせてもらう。その時に雨が降っていても降ってなくても「御山快晴・御山晴天」。先達の先生に雨が降っているのに「御山快晴・御山晴天」といって登るのか?と聞いたら、俺たちの上に雲があるから雨が降っているだけで、雲の上にはお天道様が照らされているから晴天なのだから雨が降っていても「御山晴天」と言っていていいと教えてくれた。山へ登るときは歌い調では登れないので一つのリズムを持って一歩一歩ゆっくりと登る。先達が「六根清浄」というと、私たちも「六根清浄 懺悔懺悔…六根清浄 御山快晴」と声を出しながら登る。声を出さないとずいぶん叱られた。声を出すと人は常に空気を吐き出している、空気を吐き出すという事は空気が入ること。掛け丈を掛けながらずっと登るということは、一歩一歩のペースを崩さなくて歩くと楽だということ、同じペースで呼吸をしていることが大変に重要だということ。山酔い、軽い高山病、3200mを超える

と1割くらいの方が頭痛や吐き気を感じるようになるが、それが少しでも治まるようになる。  
ここに大正年間に菊池貴一郎さんが書かれた文章がある。「絵本江戸風俗往来」という中に書かれた富士講の姿の文書。「道中の辛苦より登山の艱苦（かんく）を嘗（な）めるは冥利冥加（みょうりみょうが）をわきまえ身の奢侈（しゃし）を慎むなど実地修業なり。山中また数々の禁制ありて、心の穢（けが）れを清むる六根清浄（ろっこんしょうじょう）の御山（みやま）の難しさそのあるをさとるかや。」道中の苦しきより、登山の難苦しきを嘗めるのは、冥利冥加、ありがたさをよく感じ、ぜいたくを慎むなどの実践ですよ。山中にはやっではいけないことがある。そして心の穢（けが）れを清める六根清浄を唱えながらの御山に登るその苦しきがあるということをよく感じなさい。「登山の旅装は質素にして勇ましい出で立ちなり。白木綿の行衣（ぎょうい）、手甲脚絆（てっこうきゃはん）、草鞋を踏み、白の鉢巻、名玉（めいぎょく）を連ねたる数珠（じゅず）を手襷（たすき）に掛け、菅笠は講中の印を付け、金剛杖をつきたるなり。肩より掛けたる鈴（れい）の音はさながら不浄を払いて響く。」

ー1本の映像を視聴（アルジャジーラ イングリッシュのニュース映像）

ーアルジャジーラ TV のコロナ禍における富士信仰はどうなっているのかという取材の動画。アルジャジーライングリッシュという放送局のワールドニュース。コロナ禍で日本の富士山は登れなくなっているという取材。世田谷の扶桑教太祠。扶桑教のベースにある富士塚に私が登る様子。富士塚は当時江戸市中に「江戸八百八町に、八百八講あり、講中八萬人」と言われるほどたくさん講社があり、富士講を信仰する方がたくさんいた。町内に競い合って富士塚を作った。なかなか御頂上まで登るのは難儀。今はバスや電車で新五合目まで行って登る。江戸時代においてはもっと大変。江戸富士講は、富士山へは甲州街道を通って高尾に入る。高尾山に蛇滝があり、滝で滝行をし、そこで身を清めて、そこから富士山の精進が始まる。蛇滝の脇から、細い道を上がり薬王院まで上がり、お参りをして、昔は一泊をしたようだ。翌朝、薬王院からもう一つ御頂上の奥の院まで上がると、御頂上に浅間社をお祀りをして（今は御頂上より離れた所にある）、両扉、前と後ろに扉が付いていた。後ろの扉を開けて、前の扉を開けると何も神様が入っていない。そこから正面を見ると、ひざまついて手合わせすると目通りに富士山の御頂上が見えた。そこからダイヤモンド富士がお彼岸に出る。そうやって富士山を高尾山頂から拝んで、いよいよそちらに行きますと心を決めて、小仏山の尾根づたいに歩く。尾根づたいに行くと見晴茶屋、小仏山の山頂につながる。そこからずっと下り、弥勒茶屋という、今でも小さな売店があるがそこへ下りて行って、相模湖の弁天橋にたどり着く。私は朝7時に高尾山頂を上がるとゆっくり下りて弁天橋に11時半までには着く。もっと健脚の方は10時過ぎには着くかもしれない。大月の猿橋、富士吉田に入り、そこから登る、北口を登り、御頂上まで行くと、八合目までは同じ道で下りてきて、八合目から二本に道が分かれる。一本は東口、もう一本は吉田口を下りる道。間違っ下りる人がいる。富士講は色んな講社があるが、有名などころでは麻布の山三講、更科の御蕎麦屋さんが講中をやっていた。この講社は北口から上がって東口を下りて、東口から足柄へ出て、最乗寺さんへ下りる。大山へお参りをして、藤沢へ出て江の島をお参りをして、品川からへ上って帰る。私どもも明治には東口に大きな教会所があったようだ。残念ながら今はないが、昔何で北口教庁があって、別に北口って言わなくてもいいのではと思ったが、考えてみれば北口教庁と東口教庁を一對にして置いていたという事だと思う。先ほど石橋さんが場所を教えてくれたが、登山道の入り口の所に図面では扶桑教東口教庁があったようだ。江戸富士講も東口で大変皆様方にお世話になって富士登拝を行わせていただいていたという事。願わくば、いずれ東口にも昔の香りが残っているものを設けたいものだと思う。

今日は皆様方に「おふせぎ」というお札のようなものをお渡しした。中に説明文が入っている。「元和六年(一六二〇)七月富士道開祖長谷川角行様御年八十歳の7月、富士山頂でご修行中、江戸の信者より急報があり、市中につき倒しという奇病(コレラ病)大流行、急死する者無数の中、溪巖・泰宝を伴って急ぎ下山、江戸に赴いて病氣平癒の醜祈願を巖修し、参の字の「御楓佚伎」なる神符を庶民に授け疫病がおさまりました。」ということ。中身を開けると「参」の字が三十書いてあるお札が出てくる。昔は、参の字を一つずつちぎってきれいなお水で飲んで御祈願して、疫病にかからないようにした護符。不思議なことにちょうど今から400年前。今から100年前がスペイン風邪。今から400年前に、江戸では大勢の方が亡くなった疫病が流行った。この護符は私どもはそれ以来直伝として伝えさせていただいているもの。今日は御縁なので、これを肌身につけていただいて、今のコロナ禍をつつがなく過ごしていただきたいと考えている。コロナを防ぐためには手洗い、マスクなどで飛沫を防ぐと言うが、私たちは手水舎があり、お水で手を清めてから神仏にお参りをするのが日常。お茶席に入るときも御手水で手・口を漱いでから入る。私たちは手を洗うという事は心を清める、それがワンセット。それに関して違和感がない。食事やおやつも前の手洗いを幼稚園に入ると一番最初に教わる。そう考えると私たちにとって手を洗うことは、日常そんなに特別なことではない。なおかつお食事を頂くときも一膳のお箸を持っていただく。豪華な西洋料理はナイフやフォークがたくさん並ぶが、パンは手で食べる。しかし私たちの先人はどんなに質素なお料理、一汁一菜のお料理を食べる時もお箸を持って食べる文化を培ってきた。家に帰ると必ず靴、草履、下駄を脱ぐ、これも日本特有の一つの文化。コレラや色んな日本の文化の歴史の中で先人たちがたくさん疫病を経験した中で、日常にこのような文化を育んできたというのはそれから学んだものであるかもしれない。第一、手を洗うにしても水がないと洗うに洗えない。海外では大変水が貴重なため、水で洗えばいいが水がどこにあるの?という国土の国もある。そういった意味では私たちはこの豊かな自然と豊かな水、それに恵まれているが故に手を洗うという文化が育まれた。ということを見ると、私たちは豊かな自然に恵まれ、先人たちの知恵に助けられて、今コロナ禍においても他国に比べ日本の感染者が少ないというのが現実。先人たちの知恵や文化に助けられているのではないかという風に、深く感謝をしたいと思う。皆様方には今日は異常事態ということもあって、リモートで画面を通してお目にかかることになった。本当は対面しながら質問なども受けながらお話を進めていきたくしたが、今回はこういうことでお許しを頂きたいと思っている。富士山は今年一年お休み。ハワイでは、州の土地天然資源局の方の話によると、浜辺に生息する貝類や絶滅危惧種のハワイアンモンクシールという生物がかなり増加しているということもあるようだ。オアフ島でウミガメが産卵を始めたという事実もあるようだ。毎日新聞で読んだが、インドの北部のジャランダールという都市から30年ぶりにヒマラヤ山脈が眺望できたという事例もあるようだ。実は人間の社会生活をいったんお休みする事により、空気がきれいになったり、海がきれいになったりしているというのも事実。この一年は私たちにとっては色々制約があつて厳しいけれども、地球のことを考えると100年に1回の地球の日曜日だと思って、私たちは地球のためにも工夫をしながら自分たちの生活を続けていくという事が重要なのではないかと思う。

皆様方には一層健康に留意されて、健やかな毎日をお祈りをしながら本日のお話とさせていただいた。